解凍された旧世界

ポッキン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
解凍された旧世界

【Ｎコード】
Ｎ５７３０Ｚ

【作者名】
ポッキン

【あらすじ】
２２世紀終盤、人類の人口は爆発的に増え、地球の総人口は１２０億を突破した。人口爆発に伴う食糧不足を切欠に第三次世界大戦勃発。戦争は１５年続き、唐突に終わりを迎えたが、戦争の爪あとは大きかった。
飢餓と戦争により人口は５０億まで減り、戦争で大量に投入した新兵器により環境破壊が急激に進んだ。その結果人間は体内にナノマシンを投与しなくては生きていくことすらできない世界になっていた。それからの人類は生きていくために一丸となり、刻々と悪く

なり続ける環境に合わせナノマシン開発を行っていった。
　そして、あるナノマシンが開発された。そのナノマシンは外部の環境に適応して、人体を作り変える自己判断自己進化のプログラムが搭載された画期的なものだった。［Ｅｖｏｌｖｅ　Ｎａｎｏｍａｃｈｉｎｅ］通称［ＥＮ］と名づけられたナノマシンは賞賛を持って世界に受け入れられた。その後ＥＮは全人類に投与され、人類は平穏を手にした。

だが

その１年後に人類は滅んだ。

ＥＮ最初の被験者にしてサンプルとしてコールドスリープを続ける一人の青年を残して。

00

薄暗い部屋の中で三人の男達が動きまわっている。部屋の大きさはおよそ２０メートル四方。床には埃が降り積もっていて、今いる男達の足跡以外にも他の人間の足跡や何かを引きずった跡も見える。男達はその部屋を外から漏れる光と手に持ったランタンの灯りを頼りに物色していた。

「お頭、もうこの遺跡には何も残ってないんじゃねえですか？」

一番小柄な男が声をあげると赤い布を頭に巻いた人間が振り向きながら怒鳴る。

「バカ野郎！　文句言ってないで探せ！」

お頭と呼ばれた男はそれだけ言うと小柄な男を睨みつけた。一方睨まれた小柄な男はビクッと体を震わせると、離れた場所にいた長身の男のところまでそそくさと歩いていった。

「ッチ、見つけたところで碌な分け前よこさねえくせに……お前もそう思うだろ？」

小柄な男は悪態をつきながら長身の男を見る。その男は部屋の壁を触って天井を見上げながら言った。

「確かにお頭は横暴だけどな、あの人は妙なカンを持ってる。そのお頭が探せって言ってんだ。たぶんここにはなんかあるんだろうよ」

小柄な男はその言葉を聞いたあと、部屋を見渡して首をかしげた。
「城の発掘部隊が調査したばっかりで、見ての通り何にもないじゃねえか」
長身の男は一つため息をして小柄な男を見ながら説明を始めた。
「遺跡ってのは生きてるのと死んでるのがある。遺跡が生きてりゃあどっかに隠し扉を開ける装置があったりするんだよ。この遺跡はな、たぶんまだ生きてる」
もう終わりだお前も働け、と言って長身の男は再びぺたぺたと壁を触り始めた。
「生きてる……ねえ？」
小柄な男はまだ納得がいかないといった様子だった。だがサボってまたお頭に怒鳴られるのも嫌だったのか、なんとなく壁に触れる。すると触れた壁の一部が青白く発光し、どこかからポーンという音が鳴った。
「うわっ！お頭！壁が光った！！」
今まで何度か遺跡を漁りに行ったことがあるんだろうが、こんなことは初めてだったようで、慌てた様子で叫んでいた。その声と光に気がついたお頭と長身の男が集まってくる。
「こんなもん見たのは初めてだ。こいつは……大当たりかもな」

発光する壁を見ながらお頭がそう言うと、周りの男達も息を呑んだ。壁の一部が発光していた状態だったのが、長方形の光のラインになり、空気が吐き出される音と共に光で区切られた長方形の壁の部分が横にずれて大人が二人ほど通れそうな入り口になった。

「入って調べるぞ」

お頭の言葉にこくりと頷いた男達は慎重に扉を潜っていく。扉の中は5メートル四方の部屋で、中央には楕円形の棺のようなものがポツンと一つ鎮座していた。棺のようなものは全体的に灰色でオレンジの光のラインが表面に走っており、ブゥーンと低い作動音を発している。

「とりあえず調べてみろ」

お頭の命令で長身の男が棺を調べ始める。棺の周りをぐるっと一周して棺の側面にコンソールのようなものがあるのを発見したようだ。

「お頭、これは？」

コンソールを見ながら小柄な男が尋ねるとお頭はニヤリと笑った。

「こいつが付いてるってことは、この棺桶みたいなやつは旧世界の落し物だ。高く売れるぞ」

それを聞いた長身の男も、うんうんと頷いているを見ると恐らく本当なのだろう。

「へえ～。こいつがねえ……」

感心しながら小柄な男がコンソールに触れるとピッという音が鳴った。

「おい！　勝手に触るんじゃねえ！！」

それを見たお頭と長身の男が小柄な男を棺から引き剥がすが、既に棺から何かのアナウンスが流れ、光のラインの色が青くなっていた。

「ああ……遅かった……」

「この……バカ野郎！　壊れたらどうすんだ！？」

勝手に動き出した棺を見て長身の男が天を仰ぎ、お頭が怒鳴り散らしながら小柄な男を殴る。

「そ、そんなこと言われても……」

小柄な男は頭を抱えて縮こまりながらお頭の拳骨を受け続けている。そんな漫才みたいなことをしている内にも棺は動き続け、扉が開いたときのような空気の抜ける音がして冷機が漏れ出した。それも見た三人の男はゴクリと喉を鳴らして棺を注視する。少し間をおいて、ゆっくりと棺の上部が開き、中から白い光が漏れ出した。

「……見てこい」

お頭にこづかれ、小柄な男がおそるおそる棺の中を覗き込み、そしてポカンとした表情になった。

「何があったんだ？　おい！　何があった！？」

呆然とした様子でその場を離れない子分に痺れを切らし、お頭が怒鳴り声を上げるが、小柄な男は反応しない。お頭は長身の男と顔を見合わせお互い頷くと二人そろって棺に近づいていった。

「……うそだろ」

「なんでこんなものが……」

棺の中を覗きこむと、その中に人間……一人の男が横たわっていた。その状況に三人は呆然としていたが、ぼそり小柄な男がつぶやいた。

「生きてるんすかね……こいつ」

他の二人はその言葉を受けて棺の男を観察する。目は閉じていて妙に肌は青白いが、生きた人間独特の生気を感じる。胸も若干上下に動いているのを見ると、恐らく生きているのだろう。長身の男が念のために脈を測ろうと首に手を当てようとして……

男の目が開いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5730z/

解凍された旧世界

2011年12月19日01時45分発行